

令和元年8月31日現在

機関番号：80101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04520

研究課題名(和文)近代北海道・樺太におけるアイヌ民族による学校設置：その歴史的意味に関する基礎研究

研究課題名(英文)A basic research and study on histories of establishment of schools by Ainu peoples in Modern Hokkaido and Sakhalin(Karafuto)

研究代表者

小川 正人(OGAWA, Masahito)

北海道博物館・学芸部・学芸副館長

研究者番号：10761629

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：(1) 近代の北海道とサハリン(樺太)におけるアイヌ民族の教育史における、アイヌ民族が自ら学校を設置した事例や、設置しようとした事例を対象とした資料調査を行い、北海道の胆振、日高、十勝、釧路地方やサハリンにおける事例を広く確認し、これらの事例にかかる基礎的事実に関する資料を収集した。

(2) これらの調査により収集した資料や得られた知見について、適宜、資料の活字化(資料紹介)や成果発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の意義は、先ず、北海道・サハリンの多くの地域における教育史の基礎的事実の発掘を行ったことにある。

研究史上の意義としては、従来のアイヌ教育史は政策史からのアプローチが多かったことに対し学校や教育に対するアイヌ民族の現実認識や将来への意思を探ることができた点に意義がある。

さらに社会的な意義としては、アイヌ民族を主体に据えたアイヌ史が求められている現在において、本研究は、アイヌ民族の意思や要求から近代アイヌ史を展望する具体的な手がかりを得た点に意義がある。

研究成果の概要(英文)：(1) Through the reseraches in various libraries, archives and some scenes, we confirmed about 10~20ceses which the Ainu peoples established schools in Tokachi, Hidaka, and Iburi in Hokkaido and in Sakalin.

(2) And we announced the outcome which studied on these ceses by artickes and lectures.

研究分野：近代アイヌ教育史

キーワード：教育史 近代アイヌ史 アイヌの教育要求 先住民族と教育 サハリン(樺太)アイヌ アイヌ学校

1. 研究開始当初の背景

(1) 課題の着想

アイヌ民族の歴史に関する既往の叙述は、多くが、近代日本のアイヌ教育政策について、「アイヌ語やアイヌ風俗を禁止し、もっぱら日本語と和風化を強制したうえで、徹底的な「忠君愛国」「臣民化」教育をおしすすめた」と「同化主義」が基調にあったことを指摘し、「アイヌ小学校は、アイヌの児童のみならずアイヌ全体にたいする同化教育・皇民化教育の拠点という役割をも果たさせられていった」として「同化」における学校の役割の大きさを指摘してきた（引用は榎森進2007）。

一方で、近代の北海道・サハリン（樺太）において、アイヌがみずから学校を設置しようとし、また実際に設置した事例が見られる。私たち（小川正人、田村将人）は、近年のそれぞれの調査の中で、このような事例を幾つか見出し、それらに着目してきた。このような、一見すればアイヌが積極的に「同化」を受容し希求したかのような事例を、どのように捉えるべきか。この問いが、私たちの問題関心の起点であった。

近代日本の統治下を少数者として生きざるを得ない状況に置かれたアイヌ民族が、自分たちで学校を作ろうとする。そこには、おしよせる〈開拓〉や〈近代化〉をまえに、自分たちが置かれた状況をどのように見据え、そこから将来をどのように切り拓こうとするのかという、この時代を生きるアイヌの意識と意思のありようが強く反映しているのではないか。私たちはこのような仮説的な課題意識のもとに、本研究課題を着想した。

(2) 研究状況と課題の意義

既往のアイヌ教育史研究において、アイヌによる学校の設置を課題として意識したものは、北海道に関する私の研究とサハリン（樺太）を対象とした本研究の連携研究者・田村将人氏によるものを除けば、ほぼ皆無であった。このことは、たんに“史実の欠落”を意味するのではなく、既往の近代アイヌ教育史の多くが政策史に視点を置き、いきおい、アイヌ民族は“同化教育”の客体として位置づけられ、“同化”を蒙るのか、またはそれに“抵抗”するのか、といった指標で物事を測りがちであることに繋がっていると私たちは考えている。

近年、アイヌ民族を歴史の主体に据えたアイヌ史像の構築が、歴史研究の面からばかりでなく、アイヌ民族の歴史と文化に関する理解のあり方を深めると言う現代的な課題からも要請される中、私たちは、本研究課題には、アイヌ民族自身がどのような現実認識に基づき、学校や教育といった社会的な機能に、どのように現在と将来への意思を示したかを探る重要な手がかりを得る意義を有するものと考えた。

2. 研究の目的

上記のような背景を踏まえ、本研究課題では、近代の北海道とサハリン（樺太）において、アイヌがみずから学校を設置し、あるいは設置しようとした事例を対象として（1）先ずこのような「アイヌによる学校の設置」に関わる事例を、資料の多寡を問わず可能な限り収集し（2）その上でこれらの事例にかかる基礎的事実（個々の学校設置の経緯と背景、活動を担った人々と地域社会の状況、設置後の学校と地域の歴史など）を明らかにし（3）個々の事例の歴史的な意味やこのような事例の時代的な推移と特徴などを検討することを具体的な作業課題とした。なお事例の収集や分析にあたっては、「学校の設置」を中心に据えつつ、教員の招へいや学校の設立・維持に対する拠金等、学校・教育の整備や充実に関わる多様な行動や議論にも着目し、これらの作業課題を通して、ひろく学校と教育に対するアイヌの意思や要求を探り、そこから近代のアイヌ民族の歩みを捉えることを目指した。

3. 研究の方法

(1)作業段階の設定

上記の目的を踏まえ、本研究課題は次の3つの作業手順を設定した。

① ひろく事例を収集する作業：各地の地域史・郷土史を調査し学校設置の事例に関する情報を収集する。この作業は、情報を収集し検討の視野を広げることにより主眼を置き、学校の設置に至らなかった事例や、教員の招致や学校の維持に主体的に関わった事例についても収集の対象とする。

② 具体的な経緯や背景を掘り下げる作業：①で確認した事例について、より具体的な資料調査を行う。個々の事例によって、確認できる資料の質量にはおのずと差があると予想されることから、①を通して、②で取り上げる事例の優先順位や重点の置き方を定める。

③ ①②を踏まえ、事例の全体的な分析や時代的な特徴等の比較検討を行い、成果をとりまとめ、発信する段階。

その上で、本研究課題の実施期間として3年間を設定し、初年度は①に重点を置きつつ部分的に②に着手、2年目は①を継続しつつ②や③に比重を移し、3年目は②③に重点を置く計画を立てた。

(2)実際の進捗

実際の各年度の事業も、おおむね上記の計画に沿って進めた。ただ、本研究課題の開始前にあたる2016年4月までの期間にも、私たちがそれぞれに予備的な調査を進めてきたことを踏まえ、①については調査実施地域を道内では札幌市（北海道立文書館、道立図書館、北海道大学附属図書館、道立教育研究所）のほか函館市（函館市中央図書館ほか）、平取町（平取町教育委員会ほか）、帯広市（帯広市図書館ほか）、美幌町（美幌町図書館ほか）、釧路市（釧路市立図書館ほか）等において実施し、道外では特にサハリンの事例について国内調査とともにロシア共和国サハリン州での資料調査に重点を置いた。このため初年度である2016年度からサハリン州については②にあたる調査を開始するとともに、③にあたる予備的な調査の結果を踏まえた講演・学会発表等も早くから実施することとし、学会発表とともに、調査実施地域である胆振地方（苫小牧市）や十勝地方（帯広市）で報告を行うことに意識的に取り組んだ。

4. 研究成果

本研究事業において得られた成果は次のようにまとめることができる。

(1)基礎的事実の調査と新たな資料

上記の研究方法における①、②を通して、道内各地におけるアイヌ民族の学校設置に向けた活動の事例を広く確認することができた。従来から自治体史等でも紹介されてきた日高地方平取町、胆振地方むかわ町、十勝地方帯広市、音更町、芽室町などの事例についてひろく調査を行えたことに加え、設置のかたちそのものは開拓使や札幌県によるものであっても、設立・維持に対して地域のアイヌが多大の拠金や協力をした、択捉島紗那などの事例についても明らかにすることができた。またサハリンについては、田村将人を中心とした資料調査により、これまで知られていなかったサハリン各地のアイヌ児童を対象とした小学校（教育所）の実態を物語る資料群を確認し、これらを資料紹介として発表することができ、十勝地方については学校教員をつとめた僧侶の出身地である長野県において多くの関係資料の所在を確認することができた。これらの作業を通して、「北海道・サハリンにおけるアイヌ自身による学校の設置」という本研究課題にかかる基礎的事実について、各地の事例をひろく収集し、基礎的事実にかかる知見の拡充を達成することができた。

(2)仮説の検証とその提供・援用

これらの資料調査及び成果発表を通して、特に帯広の学校設置に尽力したとされる伏根安太郎（弘三）や、アイヌ自身による中等学校の建設を目指したバチラー八重子らによる著述やそれらの関連資料を検討することができた。そこからは、自分たちが置かれた社会的経済的な状況の厳しさを見据えつつ、だからこそ自分たち自身の営為による学校・教育の充実が、子ども・青少年の教育そのものはもとより、自分たちの結びつきや社会の主体としての姿勢を育むことになるという意思がうかがえ、「ひろく学校と教育に対するアイヌの意思や要求を探り、そこから近代のアイヌ民族の歩みを捉えることを目指す」という本研究が掲げた仮説的な課題に結びつく知見を得ることができた。こうして得られた知見については、学会発表等による発表はもとより、私たちの勤務先である北海道博物館や国立アイヌ民族博物館等におけるアイヌ民族の近現代史にかかる展示等に反映させることを通じて、より豊かな近現代アイヌ史像を提供することに結び付けていくことを展望している。

(3)新たな課題へのつながり

本研究の成果として、今後の新たな研究の展開につながる課題や論点はいくつか得られたことが挙げられる。例えばその一つは、「アイヌ民族の教育への意思」に着目することにより、1884年の強制移住後十数年にして人口が半減するという極めて過酷な歴史を生きた北千島アイヌのような場合であっても、その厳しい歴史を見据えつつ、その中で北千島アイヌ自身の教育に

対する意志や営みを探ることができるのではないかと、といった作業課題である。これについては既に新たな調査に着手しており、千島とサハリンという、日本とロシアの2国の狭間に置かれたアイヌ民族の近現代史・教育史の展望に繋がりたいと考えている。また、こうした学校・教育に対するアイヌ民族の営みは、多くの場合において、地域の用水路や道路、渡船などの社会資本の整備など、ひろく地域社会の維持・整備への参画と関わっている場合が多く見られたことから、教育史に視点を据えた本研究の成果を踏まえ、近現代社会に対するアイヌ民族の主体的な参画の多様なあり方を探るという近代アイヌ史の課題の着想にもつなげることができた。

もとより、本研究課題に関わる未調査の資料群や、本研究課題で収集しつつも未だ十分には読み込めていない資料群、新たに事例として確認しつつも関係資料の所在に未調査の部分を残しているところもあり、これらについても引き続き調査の補充と再検討を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

- ① 小川正人、[資料紹介] 雑誌『ウタリ之光り』及びチン青年団団則、『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』、査読無、第4号、2019年、97～108ページ、http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/study/publication/bulletin_acrc_Vol4/
- ② 田村将人、[資料紹介] 先住民族政策に関する樺太庁文書、『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』、査読無、第3号、2018年、149～166ページ、http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/study/publication/bulletin_acrc_Vol3/
- ③ 田村将人、[資料紹介] 樺太アイヌ村落の生活および教育に関する視察復命書、『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』、査読無、第2号、2017年、104～134ページ、http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/study/publication/bulletin_acrc_Vol2/

〔学会発表〕(計 6件)

- ① 小川正人、アイヌの側からみた北海道150周年(招待講演)、いしかり市民カレッジ、2018年5月
- ② 田村将人、樺太アイヌ村落の生活および教育に関する視察報告書について、「北フォーラム」2018年3月例会、2018年3月
- ③ 小川正人、紗那学校の歴史—開拓使が択捉島に設置したアイヌ学校、教育史学会第61回大会、2017年10月
- ④ 小川正人、伏根安太郎、帯広に学校をつくる(招待講演)、帯広百年記念館博物館講座、2017年5月
- ⑤ 小川正人、函館・谷地頭のアイヌ学校生徒の釧路・春採の学校への派遣について、教育史学会第60回大会、2016年10月
- ⑥ 小川正人、学校をつくる—明治期北海道のアイヌ教育の歴史—(招待講演)、苫小牧市美術博物館美術博物館大学講座、2016年5月

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

①（短報執筆）小川正人、教科書とアイヌ像—アイヌ民族と教科書の問題の現在—、『世界の教科書にみる昔話』、三弥井書店、2018年、100～104ページ

②（所属機関における講座形式の成果報告）小川正人、学校をつくる—近代北海道におけるアイヌ民族による小学校設置の取り組み—、北海道博物館ミュージアムカレッジ、2017年

③（所属機関における講座形式の成果報告）小川正人、「幻の建設」に込めた意思—バチラー八重子らによる「アイヌウタリ—中等学校建設」の活動、北海道博物館ちゃれんが講座、2016年

6. 研究組織

(1) 研究分担者（連携研究者）

連携研究者氏名：田村将人

ローマ字氏名：TAMURA, Masato

所属研究機関名：国立アイヌ民族博物館設立準備室（東京国立博物館）

部局名：学芸企画部

職名：主任研究員

研究者番号（8桁）：60414140

(2) 研究協力者（2018年度のみ）

研究協力者氏名：大和田努

ローマ字氏名：OOWADA, Tsutomu

研究協力者氏名：内田祐一

ローマ字氏名：UCHIDA, Yuuichi

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。